

アウシュビッツ視察 &キエフヨーガ療法 ボランティア参加報告書

川崎正子



アウシュビッツは、一度は訪問したいと思いつけていた世界遺産。しかし、自発的に計画を立てることはなく、その間、何年も経過していた。負の世界遺産とも言われているアウシュビッツ訪問、そして2008年から古市先生を初め多くのヨーガ療法士の先輩方が築き上げてこられたチェルノブイリ原発事故被災者支援。そして、私の人生における今の私の立ち位置。絶妙なタイミング。いつものように直観が働き自分の中でGo Signが出る。家族、会社、日本ヨーガ・ニケタンの皆様の支援の元、アウシュビッツのあるクラクフ、そしてキエフへと旅立つことに。人生において遭遇するべく出来事には時期（タイミング）があるのだろうか。もしそうだとしたら、そのタイミングをできる範囲で、できる限り受け止めてみる。私のモットー。一度きりの人生だから。

まず初めに、このような貴重な機会を与えてくださった木村慧心先生、また準備段階から携わっていただいた皆様方、暖かく見守り応援してくれている両親に心より感謝いたします。ありがとうございます。



アウシュビッツのあるクラクフという街は今も中世の面影を残す美しい古都。アウシュビッツはクラクフからバスで約2時間のところに在る。私たちは到着後、昼食を済ませ、専任ガイドさんと共に、アウシュビッツ＝ビルケナウ強制収容所の中へ進む。このアウシュビッツ収容所が存在した1940年6月14日から1945年1月27日までの1686日間に、ここに収容されてきた人の数は少なく見積もっても30万人、そのうちのわずか10%が奇跡的に生き残ったと言われている。（アウシュビッツ博物館案内著者、中谷 剛さんより）

およそ27万人の命が奪われたその現場に足を踏み入れる。今生きている私は、生きていることが当たり前で、今日があれば、必ず明日もあるという思い込みの中で、生きている。生きる為に、命を守る為に繰り広げられた収容所での生活を垣間見る。その中に私たち人間が



持ち合わせる性質、弱さ、強さ、醜さ、美しさ、を観る。人間としての尊厳が奪われた過酷な環境の中で、生き抜く力。生き残る為に行わなければならなかったこと。良心の呵責。裏切り、助け合い。生き残るための勇気とその原動力。生きることの辛さと絶望感。そしてその素晴らしさと希望。もし今の私がこの環境に送り込まれたらどうなるのだろうか…。境地に追い込まれた時の自分の行動は如何なるものか。いろんな思いが過る。しかしやはり実際、その時、

その現場にいなければ、どうなるのかは決してわからない。

ツアーの最後にガイドさんから、「私たちはここで起こったことを決して忘れてはならないのです。二度とこのようなことを繰り返してはならないのです。だからもっと多くの方にこの世界遺産を訪れて頂きたい。」との力強いメッセージがあった。彼女の平和を願う気持ちが言葉から伝わってきた。

無事キエフでのヨーガ療法ボランティアを終え、無事帰国。この旅から得たものは多大。貴重な体験。そして、更に帰国後にも。



帰国4日後、TV番組で偶然にもアウシュビッツの生存者の EVA MOZES KOR (エヴァ・モーゼス・コー) さんのことを知る。彼女はヨーゼフ・メンゲレによって双子の子供を対象とした人体実験被験者のサバイバー。アウシュビッツで目にした双子の子供を対象とした人体実験の様子の写真が頭を巡る。

許しの核心「Nitty Gritty of Forgiveness」という彼女の動画では、自分を苦しめた相手、出来事を許すことで、自分自身が解放され、自由になれるとのメッセージがあった。いつまでも過去の辛かった出来事に捕らわれていると、自分自身がその出来事の奴隷となり、苦しみ続けてしまう。自分自身を解放したければ、許すこと。シンプルなメッセージ。だが、アウシュビッツの人体実験を生き抜いた EVA さんからの言葉は、重く私の心と体が震えた。

私は私の過去の辛かった出来事に対して、相手、出来事、そしてそのような状況を作った自分自身を許せなかった。後悔、落胆、反省、裏切りに対しての悲しみ、喪失感、挙げればきりのないほどの

NEGATIVE な言葉、感情を心の奥に潜めながらの日々。苦しい状況から抜け出す方法をいろいろ試した。そして、結局自分を苦しめているのは自分でしかないことに気付く。許すことで自分を解放する。やっとかわいそうな私からの卒業。一歩前へ進めた。

人生は不思議なめぐりあわせの連続。いいことも、わるいことも、つらいことも、幸せなことも、それらの出来事を観る自分の理智次第。今回のアウシュビッツ訪問は 2016 年の私のテーマと合致。これもまた人生の不思議なめぐりあわせ。このような日々生きる喜びを感じながら生き続ける。どんなことがあっても。